

第十二回 しませ 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『優秀賞』

【小学生高学年小説の部】

おもちゃの気持ち

千代野小学校 五年 朝長 ともなが 真杜 まおと

あれは、五年生の夏休みのことだった。

暑くてよくねむれない夜で、ふとんの中でゴロゴロしていたら、「ガシヤン、ガシヤン。」と、きかいが動くような音がして、ぼくは目がさめた。ちよつとこわかったけど、戸のすきまからリビングをのぞくと、何とおもちゃが動いていた。こんな時、マンガではほっぺをつねってかくにんすることをふと思いついて、やってみた。いたかった。夢じゃないってことだ。おどろいてもう一度のぞくと、ぼくのお気に入りの新しいフィギュア、切れてわたがはみ出たままのサメのぬいぐるみ、ずっとさがしていた白いミニカー、どれもこれも行進しているみたいに、動き回っていた。何だかむねがドキドキして、またふとんに横になったら急にねむくなって、気が付くと、ラジオ体そうのりんが鳴って目が覚めた。

ぼくは、昨日の夜の事は、お父さんにも、お母さんにも話さずに一日をすごした。その日の夜はぼくはずっと起きているつもりだった。昨日

の夜の事を確かめるために、おもちゃを見はついでいようと思っていた。その時「ガシヤン、ガシヤン。」と今度は、洗面所から音が聞こえてきた。ぼくはもうこわくはなかった。トイレに行くふりをして、洗面所をのぞいてみた。そして、プラスチックのニワトリを手にとった。というか、つかまえた。そしたら、

「あなたは私達を大切に使ってくれた。喜んで遊んでくれた。だから、おもちゃの国へいっしょに連れて行ってあげよう。」

と、少しキンキンとした声でしゃべった。おどろいていたのはいっしょで、たくさんのおもちゃたちといっしょにぐるぐる回りながら、何かブラックホールか巨大なそうじきやすいこまれた感じだった。数分後、気が付くと、どうやらおもちゃの国に来てしまったようだった。すぐ不思議なはずなだけで、ぼくの目の前にはそんなにおどろかなかった。しばらくすると、ぼくがようち園の時に遊んでおもちゃ箱に放りこんで忘れていた、戦隊ヒーローもののロボットがぼくに説明してくれた。

「わたしはこの国のリーダーです。この国には心のやさしい人が来て、一日をおもちゃ達と遊んでくれます。お帰りの際にはおもちゃを一つ連れていくことができます。あちらのワープとびらからどうぞ。」  
ぼくは、早速いろいろなおもちゃで夢中になって遊んでいた。そしてある事に気が付いた。おもちゃの足のうらに、まおと、たくや、みずきと名前が書いてあった。するとロボットが、

「ふっふっふっ気づいたか、おれの名はデストイヤー、人間はおれ達もおもちゃをあきるとほつたらかしてしてきた。だからおれは世界中のおもちゃを集めて人間をたおすのだ。」

と、急にこわい顔で言った。ぼくは、言い返した。

「でも、おもちゃを大切にしている子どもだっているんだ。そんな事をするなら、ぼく達がおまえと戦う。」

「ぼく達とはだれのことだ。」

と、デストイヤーが聞いてきたから、

「ここにいるおもちや達みんなのことだ。」

「おもしろい、のぞむところだ。おもちや達がお前の味方になるかな。夢だか現実だかわかんなかったけど、とにかくぼくは夢中で戦った。デストイヤーは「ビューイン」というような音の光線を出して、ぼくをこうげきしてきた。いつのまにか、ほかのおもちや達がぼくの回りに集まってきた。いっしょに戦ってくれていた。ぼくはデストイヤーをたおす方法を思いつき、おもちや達にこう言った。

「弱点はせ中のスイッチだ。そこをこうげきしたらネジを二つはずすんだ。」

おもちや達はいつせいにデストイヤーに向かっていき、あつというまに、単三の電池が二こ転がって、デストイヤーは、ピタッと動かなくなった。すると、おもちや達も小さな光になって消えた。きつと、持ち主の元へ帰っていったんだと思う。ぼくも「まおと」と名前の書かれたフィギュアを連れて、ワープとびらにとびこんだ。

夜中の、ぼくの家だった。そつと部屋の電気をつけた。つくえの上の箱があった。すかさず中を開いて見ると、そこには、デストイヤーのおもちやが入っていた。単三電池を二こ入れてスイッチを入れると「ビューイン」と音がする。正義の味方のロボットだ。ぼくにはちよつと子どもっぽい気がしたけれど、つくえの上にかざってしばらくながめていた。こわかったような、楽しかったような不思議なでき事だった。それからこんなでき事は二度となかった。でも、デストイヤーのスイッチを入れるたびに、気のせいかもしれないけどこう聞こえるんだ。

「ありがとう」ってね。

## 《選評》

あれは、五年生の夏休みのことだった。—— という書き出しで始まるこの作品は、きちんと場面の設定が決められており、しつかりとした文章構成や、会話文の書き方などが際立っています。文章を書くということに対するセンスが光る作品です。